

小松とんねる

表紙・沖末きり



童貞の男子■校生が

4人の**お姉さん**たちに

甘やかされるまで

はじめに

この物語はフィクションです。

登場する人物、団体等はすべて実在しません。

また、本作品には多くの性的な描写があります。

18歳未満のかたが読まれることを禁じております。
あらかじめ、ご了承ください。

① 混浴露天風呂にて、先輩とお医者さんゴッコ

それは2月に始まる恋のように不完全だった。

詩的な響きだ、と峰和仁みねかずひとは自分がたった今思いついた文章を反芻はんすうしながら悦に浸っていた。もしかしたら僕には詩人としての才能があるのかもしれない、とすら思った。彼はいま思春期であり、そういった若さ独特の陶醉感に浸っても許される年齢であることは確かな事実であった。

彼は所属するT学園ラグビー部の春合宿に来ていた。二月下旬という時期を春と呼んでいいのかどうかは不明だが、少なくとも創部五〇年を超えるチーム内では代々その時期の合宿を「春合宿」と呼んでいるのだから、それは春合宿なのだ。もしかすると旧暦などの事情も絡んでくるのかもしれない、もう卒業間近なのになぜ春合宿に参加できるのだという疑問も、賢い読者である皆様には当然湧いてくるのかもしれない。が、この文章の作者に文学的価値など求めても一切無駄だし、児童ポルノ法違反という大人の事情が故の年齢設定なので、どうか多めに見ていただきたい。そこらのややこしい経緯は割愛させていただくことにする。

場所は群馬県〇市。山の裾野には美しい沼地のあることで有名な土地である。T学園ラグビー部は、夏は概ね長野県の菅平に拠点を構えていたが、春に関しては毎年場所を変えていた。和仁は今年の宿に関しては概ね満足していた。それは決して星の散りばめられた群馬の夜空だけが理由ではない。

——ああ気持ちいい。

理由のひとつにあるのが、今まさに和仁が浸かっている温泉だ。

白く濁ったぬるま湯は、一日の練習の疲れをゆっくりと、しかし確実に癒してくれた。

「うーん」

未来の詩人はしかし、悩んでいた。

さきほど自身が思いついた文章の出来云々ではなく、そもそもその文章を思いつくに至った原因の「不完全なそれ」に関してだ。

不完全なそれ。

それは少なくとも彼にとっては詩よりも現実的で深刻な問題だった。

「むー」と唸る。

湯気が立ち込める石造りの露天風呂では他の部員達の呑気な話し声と、湯の弾ける音が断続的に響く。それらを無視して彼は「不完全なそれ」を眺めた。

自身のペニスである。

同級生のそれと比べても明らかに一回り小さいように感じる。おまけに仮性包茎である。最大限に勃起しても自然に剥ける代物ではなく、その全貌を拝むためには自分の指を添えるしかない。平常時の今は情けないほどに縮こまっていて、たるんだドーナツのような余った皮は小学生のそれと言われても仕方ないだろう。

むー、と再び唸る彼にチームメイトの箱崎が声をかけてきた。

「どっか痛いんか」

「ん、大丈夫だよ」

坊主頭の同級生は、T学園ラグビー部の中心選手のひとりであり、五〇メートル六秒を切る俊足の持ち主である。大阪出身の関西人であり、父親の仕事の都合でこちらに引越してきた彼は標準語と関西弁の混じった独特の言い回しを使うことがある。

「それにしても浮かない顔や」

「そうかな」

「あのかなカズよ、こんなに解放的で素晴らしい空間で。そんな暗そうな顔をしとんのはお前だけやぞ」

はは、と和仁は苦笑いでそれに応える。

「確かに」

今年の合宿が当たりだという二つ目の理由は、他の宿泊客がほとんどいないことだっ

た。受付の人に聞いたところ、一般客は皆無であり、団体客としてはT学園ラグビー部の他にどこかの女子大バドミントン部が一緒らしい。男湯に関しては和仁らで独占可能なのだ。

「そんなひどい旅館でもないのに、ラッキーだったよね」

「まったく」

箱崎はそのまま和仁の隣に腰かけてきた。○校生らしい細い体躯である二人が裸で並ぶと何とも言いようのない雰囲気になる。もうもうと立ち込める湯気がその妖しさに拍車をかける。かぼん、とししおどしが鳴る。和仁はさりげなく三角座りをするので、箱崎の位置からは自分の下腹部が見えないようにする。

友人に自分の不完全な部分を知られるのはとても恥ずかしかった。二人は積極的に会話をするわけでもなく、群馬の人知れぬ宿の温泉に浸っていた。旅館は山に囲まれている。外気は冷えたが露天風呂の辺りは温かかった。湯から発せられる蒸気のおかげか、地熱が影響しているのか、もしくははそのどちらもか。

ふと、垣根が設けられている向こう側にて女性の声がした。きっと件のバドミントン部員だろう。無意識に耳をそばだててしまう和仁は、同時にそんな自分に対しても羞恥心を感じていた。良くも悪くも、○校生らしい潔癖けっぺきさを抱えている人間なのだ。

「女子大生だぜ」

「すげえな」

「やばい。俺想像しただけでタっちやいそうだ」

洗い場にいる引地、金城、岩瀬の三人がニヤニヤと笑みを浮かべながら話している。もちろん彼らもチームメイトにして、和仁の同級生である。普段から割と問題の多いメンバーでもある。三人とも身体は大きく、引地などは185cmにして体重は90キロを超えていた。その恵まれた体躯が彼らの自信に拍車をかけているのか、一度などはサッカー部とグラウンドの使用時間をめぐって口論になり、引地は相手側の10番である川村に掴みかかっていったこともあった。たまたま川村が和仁と仲が良かったこともあってその場は収まったが。

女湯と男湯を隔てているのはどうやらその垣根のみらしい。今の時代であればもう少しセキュリティ対策していてもよさそうなものだが、そこは安旅館、あまり贅沢を言えるものでもない。もつとも引地ら3人はそのセキュリティの薄さに喜んでる気配もある。

「昼に食堂で見たけどさ、みんなすげー巨乳だったぜ」

「おお、俺も見た。ああ、あんな乳揉みしだいてみたいよな」

「うちの女子はみんなブスだからなー」

各々が好き勝手なことを言っている。なんとなくではあるが、和仁は悪い予感がした。

「おーい、変なこと考えるなよー」

金城がこちらを振り返り「わかってるって、キャプテン。俺らだってもう3年なんだからよ」、と相好を崩しながら答えた。

悪い奴らではないんだけどな、と心の中でつぶやいた和仁は箱崎に声をかけた。

「あがろうか」

そやな、と箱崎は立ちあがった。和仁もそれに倣う。タオルで前を隠すことを忘れてない。ただし必死になって隠すのもそれはそれで恥ずかしい。そこに自信のないことがバレてしまうからだ。あくまでもさりげなく、が基本だ。

脱衣所へと続くガラス戸に手をかけながら、3人の背中に声をかける。

「のぼせたりしないようにね。明日も早いよ」

「はいはい」

悪い予感がした。

忘れよう、と若き詩人は露天風呂を後にした。

*

事件は皆が寝静まった深夜に起きた。

布団の中で深い眠りにつく和仁の肩を誰かが叩いていた。

「む」

「なあ、起きてくれへんか」

箱崎だった。

「なんだよ、こんな夜中に」

枕元にあった携帯電話で時間を確認すると、午前2時を過ぎていた。

「すまん」

部屋の隅では1年生の竹内が静かにいびきをかき、と、いうなかなか器用なことをしていた。夢の中でも先輩たちにしごかれているのか、その丸い身体は何だか苦しそうな表情でいびきをかいていた。

和仁は起きぬけでなかなか開いてくれない瞼をこすりながら、箱崎に従って部屋を出る。静まりかえった暗い廊下は二人が歩きたびにギシギシと鳴った。ロビーにあと数メートルという手前の地点で、箱崎が立ち止まって振り返った。

「問題が起きたんや」

「知ってるよ」

問題が起きたのでなければこんな夜中に呼びだされるはずがない。

「まずロビーをここから覗いてみてくれへんか」

「ロビー？」

言われたとおり、少し顔を出してロビーに設置されているテーブル周りを見てみると、暗さの中に見知った3人が座っているのを見つけた。身体の大きさから一人は引地だと判断できた。とすれば残り二人は金城と岩瀬だろう。何をするにしても3人は一緒なのだ。

「夜更かし？」

箱崎は首を振って苦笑いする。

「そんな理由ならいちいち、カズを起こしたりせえへんよ」

確かに、と和仁も納得する。気になるのは3人とも心なしか気落ちしているように見えてとれることだ。いくら練習がきついといっても彼らはレギュラーメンバーで、合宿初日なのである。大きな疲れはまだないはずだ。

「どうやら一緒に泊まっているあちらさんの人らに迷惑かけてしもうたらしい。奴ら、カズに知られたくないからゆうて俺に相談してきたんやが、俺ひとりじゃ解決できそうもない。すまんが、話だけでも訊いてやってくれへんか」

常夜灯の薄い照明が箱崎の頬にできているニキビを照らしていた。どんな厳しい練習

でもおどけた態度を崩さない関西人の険しい表情がそこにあった。わかった、と和仁はうなずいた。

「聞かないわけにはいかないね」

「すまん」

彼らは3人の座るロビーに足を向けた。

テーブルを中心にして和仁と箱崎が並んで座り、その向かい側に引地と金城、岩瀬らが移動した。

「もう一度、最初から話してくれへんか」

ドスの利いた迫力のある声で箱崎が3人に言う。こういう時の関西弁は迫力がある。便利だな、と他人事のように和仁は思った。こんな夜中にごめん、と岩瀬が口を開き、あらましを話し始めた。

「俺ら、夜中にもう一度露天風呂に入りに行ったんだ。そうしたらぜんぜん人の気配がなくてさ」

夜中、彼らはもう一度温泉に浸かろうと露天風呂へと向かった。が、人の気配がないのを知るとついつい魔が刺してしまったようで、こっそりと女湯の暖簾をくぐり、脱衣

所に入ってみることにしたのだ。

「でも何かをするつもりなんてなかったんだ、後で笑い話にでもなればいいかなって」
「なるかいな」と、箱崎がつぶやく。

見張りは岩瀬が引き受け、先に引地と金城が入った。男湯とほとんど内装は変わらなかつたらしい。それでも何か女子大生の入っていた痕跡がないかと、衣類置きのかごをひっくり返したり洗面台下の棚を開けてみたり、少しの間探しまわつたらしい。

「アホ」と、箱崎が再びつぶやく。

だがそこで見張り役をしていた岩瀬も辛抱を切らして中に入ってしまった。引地は「ばか、お前が来ちゃつたら誰が見張るんだよ」と言いながらもまだ余裕の表情を浮かべていたらしい。そんな引地に金城が「しっ」と声を潜めるよう合図した。

「ん？」

「足音が聞こえる」

「やっべー」

3人は慌てて脱衣所を後にしようと廊下に飛び出した矢先、相手の女子大生とぶつかってしまったらしい。彼女もまさか男子が中にいるとは思ってもいなかっただろう、キヤッと短い叫び声を上げてその場に尻餅をついた。3人は「すみません」と口ぐちに叫びながらもその場を走って逃げてしまった。冷や汗をかきながら部屋に戻った3人だが、

旅館に泊まっている男は自分たち以外にいないことから絶対に朝になればバレる、と思
い、彼女に謝ろうと再び露天風呂に向かった。が、再び人の気配は皆無になっていた。
どうやら風呂に浸からずに部屋に戻ってしまったらしい。

かといって夜中に女の子たちの寝ている部屋のドアをノックする勇気もなく、どうし
ようかとロビーで焦っていたが、良い解決策が思い浮かぶはずもなく、仕方なしに箱崎
に相談したという顛末だった。

「まったく余計なことしてくれたな」

箱崎の愚痴に3人は珍しく反論もしないでただ首をうなだれている。

「謝るしかないね」と、和仁。

「謝るいうても、難しいで。下手に大事にしたら向こうの監督さんとかの耳にも入っ
て、学校同士の問題になってまう。部員間だけで済ますんがベストやけど、相手の顔と
か憶えておらへんのやろ？」

「暗かったし、こっちも慌ててたから」と、金城。

「髪は短かったような気もしたけど」と、弱々しく岩瀬が後を引き継ぐが、「んなも
ん、ショートヘアの子かて多かったわ、それだけじゃよう絞りきれん」と、箱崎はきつ
ぱりと言う。

「な？　ってことは誰かに個人的に謝ることはできん。とれる策といえは、朝の一番

にあちらさんのどなたかに「すみません、昨夜僕らがこんな失礼をしてしまいました」なんて話を振らなあかんわけや。まず向こうの誰に声をかけるか、そしてこっちは誰が声をかけるか、や」

それまで黙っていた引地が顔をあげた。

「俺がする。二人を誘ったのは俺なんだ。責任くらい俺がとる」

おまえなあ、と箱崎が言った。

「お前みたいなイカツい男に朝一番で話しかけられてみい。年上といえど向こうは女の子やで。怖がって警戒するに決まっとるやないか」

くあ、と箱崎は欠伸をした。もう夜中の3時近くになっていた。

起床予定時間は5時半だった。ふう、とため息をついて和仁は言った。

「わかった。いずれにせよ、今晚謝ることもできないようだし、朝いちで向こうの誰かに僕が声をかける。引地たちが出くわした人に謝るのももちろんだけど、僕らがルール違反を起こしてしまったこと自体に謝らなければいけないわけだから、その人だけでなく向こうのチームに謝る必要がある。それには僕が行くべきだよ」

察しの良い読者であれば気づいているかもしれないが、和仁はチームの主将だった。謝罪と感謝の言葉を口々に吐く3人に箱崎が「お前ら、合宿中は練習禁止やな」と告げた。グラウンドで練習できずにいる姿を下級生やらに見られるのは彼らとしてはかなり

の屈辱だろう。そんな、と悲痛な表情を浮かべた岩瀬を箱崎は無視した。

「ある程度の罰がないと、向こうにも示しがない。箱崎の言うとおり、しばらくは3人ともチーム練習禁止とするよ。」

「退部にさせられただけマシやと思え。お前らがやったんは犯罪行為やねんぞ」

もう部屋に戻ろう、と和仁は皆に言った。すっかり気落ちした3人は箱崎にせつつかれるようにして立ち上がった。空調機のぶううんという機動音が終始、ロビーの静寂を強調していた。

憂鬱な朝はすぐにやってきた。

グラウンドに向かう他の部員らをよそに、和仁は旅館のロビーに居残ることにした。昨夜と同じ場所にて少し待っていると、同じく朝連に向かおうとする女性ら数人がロビーに現れた。

「あ、あのすみません」

緊張で舌がもつれた。

「なーに？」

中でも肉付きの良い、ショートボブの髪型をした女性が気さくな感じで返事をしてく

れたのが助かった。ここで告げることもないかもしれないが、和仁はその短い人生において恋人というものを一度ももったことがない。もちろん童貞であり、見知らぬ女性に声をかけるのは結構な高さのハードルであっただけに、そっけない彼女の返事が和仁にとってはあるがたかった。背の低い彼からすると少し視線を下げたそこに彼女の大きな胸があった。Tシャツ姿なので必要以上に主張が強いようにも思える。和仁は無理やり視線を上げた。

「ナンパ？　こんな朝早くに」

と、とんでもない、と慌てて首を振る。

「昨夜に、うちの部員がどなたかにご迷惑おかけしてしまったみたいで」

「へー、聞いてないけど」

「本人らは相手が暗くてよくわからなかったらしいんです。でも謝りたくて」

すみませんこんな朝早くに、とお詫びの一言を付け足しながら頭を下げた。

朝の鐘が鳴った。6時になっていた。

彼女は少し考える素振りをした後に「わかったよ、事情を訊かせてくれればアタシが当人を探して会わせるよ」

食堂の方向を指差すと、一緒にいたメンバーに「先に体育館に行つて。時間になったら始めていいから」と告げる。わかったー、と気軽に返事をするあたり、全員同学

年なのかもしれない。

「すみません」

「いいからいいから」

和仁は彼女の後について食堂に入った。

結論から言うと、今回の件に関しては、丸く収まることとなった。

肉付きの良い彼女への事情説明も、内容に関しては昨夜に彼が引地たちから受けたものとほぼ変わらないので、ここでは省くことにする。代わりに彼女について少し書く。

千葉県のK大学バドミントン部4回生である彼女は名前を椎名かりん、と名乗った。

他の部員にも言えることだが、がっちりとした筋肉質な太ももをしているのがジャージ生地の上からでもわかった。右耳にはピアス用の穴が空いていた。他の部員よりも一際胸ひときわは

大きく、彼女が食堂の椅子に腰かけると、たふんという音が、実際にはしてないだろうけど、重力に従い地面に向けてその丸く豊かなかたまりは弾んだ。

短いながらもふんわりとボリューム感のある髪には女性らしい艶やかさがあり、対面の席に和仁が座るとほのかに甘い香りがした。そしてたまたまというべきか、彼女がバドミントン部の主将でもあった。最初に責任者と話をできたのは幸運だ、と和仁は安堵

した。

事情を説明し終えると、彼女は軽く笑い声を立てた。

「たぶん大丈夫、うちの連中もそれだけで何かしら騒ぎ立てるような子はいないはずだよ。お互い怪我もしてないみたいだし、良いんじゃないかな」

「すみません」

食堂にある壁掛け時計の秒針がカチコチと音を立てていることに今さら気づいた和仁は、次に何と声をかけるべきか迷っていた。「じゃあこれで」と席を立つにはあつさりしすぎているような気がしたし、かといって下手に世間話をするような間柄でもない。

「静かだね」

「そうですね」

「ねえ」

「はい」

「もう少し、ここでサボっちゃおうか」と、かりんがぺろっと舌を覗かせて言った。

「チームのトップがそんなこと言っちゃっていいんですか」

「トップだからいいのよ。主将が物事に柔軟に対応できないでどうするの」

「気のせいかな、屁理屈のように聞こえます」

「たぶん気のせいじゃないと思う」

「ハハ」

思わず声が漏れた。和仁はそれまで張りつめていた空気が緩やかになってゆくのを肌で感じる事ができた。彼女も察したのか、「やっと笑ったね」とわざとらしく肩をすくめてみせた。

「年上の女性には敵わないな」

「年上の女性は好みじゃないかな、カズ君は」

かりんが両肘をテーブルの上に乗せて身を乗り出すので、自然と胸の膨らみが強調される姿勢になった。パーカーの上からでもわかるサイズなので目のやり場に困る。ふふ、と微笑に笑う彼女の様子からすると、胸を見てしまっていることはたぶん、バレている。彼女の頬には薄くファンデーションが塗られていた。

「あ」と、和仁。

「なに？」

「じゃ、お茶いっぱいだけ飲んだら戻りましょうか」

「そーね」

さすがに朝の練習を丸々サボるのはまずいが、それくらいの間なら許されるだろう。誰が許すのかはわからないがボンヤリとそんなことを思いながら、調理場のほうへお茶をもらいに和仁は席を立った。

「慣れてるでしょ、女の子と話すの」

二人分の湯呑を手にとって戻った和仁に、かりんはそう切り出した。

「まさか」

「ふーん」

疑わしそうな視線を向けられて鼓動が高まるのを感じる。

「ほんとですよ。今まで女の人と付き合ったこともないですし」

「うそ」

じゃあ、カズ君はアレ？

「アレってなんですか」

かりんの唇が動いた。厚ぼったい唇にはどこか妖しい魅力があった。

え、なんですかと今度は和仁が身を乗り出す。その耳に彼女が「どうてい君？」とき

さやく。ささやかれた耳が赤くなった。

「な、なんてこと聞くんですか！」

女の人がそんな言葉を口にしちやダメですって、と言いながらも彼自身、その言葉に

無自覚のうちに興奮していた。

「ふふ、確かにその様子だとそこまで慣れてるわけじゃなさそうね」

「でも」

ふと気になった。

「なんで僕が女性に慣れてると思ったんですか。今だってめっちゃ緊張してるのに」

「んー」

なんでだろうね、と頬杖をつく目の前の女性には確かに和仁とは違い、どこかしらの余裕があるように感じられた。経験の差なのかもしれない。

「合宿はいつまでなんですか」

今度は和仁のほうから訊いてみる。

「えーと今日が水曜だから、日曜日に帰る予定かな。そちらさんは？」

「一緒ですね」

「ラグビー部だっていうから大男を想像してはいたけど、カズ君みたいな小柄な子でもできるんだね。うちの大学のラグビー部とは大違い」

「そりゃあ、大学生とは身体が違いますよ。それに僕みたいなのが通用するのは○校生までなのかもしれません」

「進学はするの？」と、かりん。

今のところはその予定だと告げる。

「進学しても、ラグビーを続ける？」

その問いにはすぐに答えられなかった。彼も迷っていたからだ。代わりに訊いてみる。

「かりんさんは」

「なに」

「卒業してもバドミントンを続けるんですか」

続けられたらね、という答えが返ってきた。

「なんか真面目な話になっちゃったね」

「確かに、そうですね」

今日初めて相對する女の人と将来についての話している自分が信じられなくもあつた。世界は不思議で満ちている。

「ねえ、そんな真面目な話。今はよそうよ」

「へ」

「せっかく年下の男の子と二人きりなんだもん。お姉さん興奮してきちゃったな」

「い、いやかりんさん。僕たちは今日出会ったばかりで」

和仁の言葉を無視してかりんは彼の手を取り、自分の胸元に導く。

「ほら、お姉さんの胸、すぐくどきどきしちやってるの。わかるでしょう」

「ああ」

右の手の平が彼女の豊かな丸みにあたり、むにゅっと押しつぶしていた。

「だ、だめですよ」

「でもココはそんなこと言ってないけど」

テーブルの下で股間をつつかれる、犯人はおそらく彼女の足の裏だ。

「かたくなっちゃってるよ」

「ああ、だめです。かりんさん。こんなとこ誰かに見られたら」

いつの間にか二人は裸になっていた。アダルトビデオで見たようなきれいな乳房に和仁は頭を埋めていた。

「あん、カズ君のえっち」

「ふわああ」

彼の小さくもビンビンにそそり立ったそれを、かりんの指が優しく上下にしごく。彼女の剥き出しの乳房、ちらりと見える下腹部の豊かな繁みが目に入る。大きくて綺麗なお尻がある。理性の無力さを思い知る。

「ああ、おっぱいが」

「そーだよ。カズ君の大好きなおっぱい好きにしていよいよ」

「あああ」

彼は無我夢中でそれに吸いついた。
あん、いやんと彼女のあえぎ声が響いた。

「カズ君」

「あ」

かりんが目の前で手を振っていた。もちろんというべきか、二人とも服を着ている。

「ボーっとしちやつて。そんなにアタシは退屈な話相手かしら」

「すす、すみません。そういうわけじゃないんですけど」

和仁は慌てて頭を下げた。いつの間にかふたつの湯呑は空になっていた。

「そろそろ戻ろうか、いい時間だし」

「そうですね」

あ。

「どうしたの？」

先に席を立った彼女が訊いた。

「先に行ってもらっていますか。僕は片づけをしてから行きますから」

「ああ、ありがと」

彼は心の中で胸をなでおろした。今、席を立てば見事にテントを張った彼の下半身を見られる恐れがあった。妄想が血液を海綿体まで運んだのだ。

「そうそう、お昼の時間は一緒だったよね。それまでに昨夜、お風呂に行った子を探しておくから」

「ありがとうございます」

じゃあまた、とかりんが食堂を出てからようやく和仁も席を立つ。思ったとおり、股間のテントは不必要なほどに自己主張をしていた。それもすべて、あの妄想が原因だ。

「あーあ」

誰もいない食堂でひとり前屈みになりながら湯呑を運ぶ彼は、その背中をかりんがこっそり見ていたことまでは気づかなかった。

合宿はまだ始まったばかりである。

*

T学園ラグビー部は激戦区と呼ばれる東京都内においても、有数の強豪としてその名

を冠していた。ただしここ数年は他校に席を奪われがちで、その世代のラグビー界において最も名誉ある大会とされる冬のインターハイでは、10年近く本戦への出場を逃しているのが現状である。そんな状況を打開できるのではと評されているのが和仁と箱崎が中心となっている今年のチームであった。期待するOB選手も多い。

「ハリー（急げ）！ ハリー！」

「接点で負けるなよ！」

「みぎー、右出せ！」

土埃の舞うグラウンド上では部員らの掛け声以外にも、監督やOB選手らの怒号が飛び交っている。朝食前の練習は軽めのランニングと数本のダッシュなどフィジカル系のメニューに限られるが、昼食前の午前練習では本格的なゲーム練習が始められる。そんな中、レギュラーメンバーであるはずの引地と金城、そして岩瀬は黙々とグラウンド周りを走っている。

「少し可哀想すぎたかな」

ロストボール（ボールがグラウンド外に出て、プレーが一時的に停まった状況）のとき和仁が箱崎に言うとき。

「かまわんやろ。向こうが理解ある人らだったからラッキーなだけで、もつと大事おおごとになってもおかしくなかったんやから」

向こうのチームはこの時間、県営の体育館まで練習に出かけているらしい。かりんさんに承諾をもらった件は箱崎にだけ話し、当の3人にはまだ言っていない。ましてや監督には「あの3人にはペナルティを課します」としか言わず、事件の何も説明していない。なにも訊いてこなかった初老の監督に胸の内で和仁は感謝した。

「なあ、カズ。それで向こうの人とはどんな話をしたんや」

「普通の話しかしてないよ？」

「それでも自己紹介とか、そんぐらいはするやろ」

二人とも腕を組んでプレーの止まった位置を指差したり、相手陣地に立つ誰かに視線を走らせたりしていた。傍から見ていると、さもラグビーについて話し合っているように見えるだろう。

「ああ、まあそのぐらいは」

「なあ、カズ。俺が奴らみたいな卑怯な真似はせえへんことを知ってるよな」

汗まみれの額に赤みが刺しているのを和仁は確認する。

「箱崎はカノジョがいるからいいじゃないか」

和仁はこの無骨な男が意外と女子には人気があることを知っていた。もしくはその無骨さが良いかもしれない。世界は不思議で満ちている。

「女子大生やぞ」

「知らない」

「俺が可哀想やとは思わんのか」

「思わない」

ちくしよー、と歯ぎしりをしてわかりやすく悔しがる友人を見ているのは割と面白い。食堂と一緒にサボった事実をこの男に言っても問題はないだろうが、なんとなく自分とかりんさんだけの秘密にしたいという想いがあった。秘密を共有することが男女の仲を進展させるための秘訣ですと、バラエティ番組に出演していた女性タレントが言っていたのを思い出した。

ボール！

気づけばプレーが再開されており、二人は慌てて持ち場に戻っていった。

練習を終えると、外で簡単な水浴びを済ませてから宿内に戻るのが恒例の流れとなっていた。合宿用に宿舍施設のある宿の場合は室内のシャワーも存在するが、そこまで贅沢は言っていない。各々が寒さに悲鳴をあげながら身体やスパイクについた泥汚れを洗い落とす。和仁が水浴びを済ませて宿に戻ると、ロビーに知った顔があるのを見つけた。

「やあ」と、かりんが手を振っていた。

その隣には彼女より一回りほど小さい女の子がぺこりとお辞儀をしていた。その子も髪が短いので並んでいる二人はなんだか姉妹のように見えた。小走りで二人の元まで駆け寄る。

「すみません、待たせてしまいました」

「そんなに待ってないよ。部屋に戻ってもやることがあるわけでもないしね。そうそう、紹介するよ」

そうやって隣にいた女性の肩を叩く。

「なんか騒ぎにしちゃってすみません。アタシ、K大学バドミントン部3回生の山口めぐみです」

恋はするものじゃなく落ちるものだ、と江国香織は書いた。

それが本当なら、この時の和仁はどこに落ちたのだろうか。

このとき、和仁はどこかに落ちた。

恋をしていた。

「あ、T学園3年の峰和仁です」

めぐみは決して美人という顔つきではなかった。小さな和仁よりさらに背の低い身長は女子の中でも小柄とされる部類にくくられるだろう。それでもちよこんと突き出した唇

から発せられたハスキーな声含めて、とてもチャームिंगな女の子だと和仁は思った。

「カズヒト。ああ、だから椎名先輩がカズ君って呼んでたんですか」

「そう呼ばれることが多いですね」

恋と呼ばれる穴に落っこちたままの和仁に手を差し伸べるかのように、かりんが口を開いた。

「考えたんだけどさ、本人たちに謝らせなくていいと思うの。というか、むしろそれでお互い面識ができちゃうとなんか変な感じになるでしょ」

「確かに」

被害者と加害者が顔を合わせるのはいくつかもしいのかもしれない。

「だからその、3人？ には反省してもらえればそれでいいよ。こうしてカズ君がわざわざ謝りに来てくれたんだから」

「アタシ、あときは旅館の人だと勘違いしたんです。お風呂が掃除中なのかなって思っただけですし」と、めぐみも続けた。

「二度とさせないようにします、本当にすみません」

深く頭を垂れる和仁に、その空気を和らげるようにしてかりんが言った。

「カズ君のこと話したらめぐみも会いたいわってうるさくてね」

「椎名先輩、アタシそげんこと言うちよらんです」

身内に話すめぐみは和仁に対するそれよりもくだけた態度であり、目の前で親しげに話す二人が羨ましくも感じた。

「山口さんは千葉の人じゃないんですか」

「あ、はい。アタシは高知から出てきたんです」

「土佐弁だよねー、めぐ」と、めぐみの頭を撫でるかりんに、された本人は「子どもやないんですからー」と小さな抵抗を見せている。よく見れば彼女も胸が大きい。かりんほどではないにしろ、灰色の無地のパーカーをこんもりと盛り上げる山が二つ、ある。巨乳の子が多い、と昨夜にあった風呂での金城の言葉は嘘ではなかったようだ。

「まあ、めぐはこんなだけど（こんなってどういう意味ですか、と横から入った突っ込は無視する）、口の軽い子じゃないことはアタシが保証するよ。今回のことはこれ以上広めないようにしたほうが、お互い面倒がなくていいんじゃないかな」

「それで皆さんがいいのであれば」

アタシらはかまわないよ、なあ。

はい。

「ありがとうございます」

再び頭を下げた和仁はめぐみが、履いているジャージの裾をまくっているのが目に入った。肌は赤子のように白く透明な色をしていた。直視しないように目を閉じた。脳裏

に今の光景が復元されてしまうのを抑えきれなかった。

「じゃあ短い間だけど、合宿中お世話になります」

「お世話になります」

お辞儀する二人は、やっぱり仲の良い姉妹に見えた。

トマトとチーズのサンドウィッチ、それに豆乳という軽めの昼食を終えてから午後の練習に入った和仁は今までにないくらいに絶好調であった。

「いいぞ！ カズ！」

「ナイス！」

彼の心はとても落ち着いていた。

——もう一度、山口さんと話したいな。

今の和仁にとって大事なのは午後の練習試合に勝つこと、ラグビーが上手くなることではなく、どうすれば山口さんとお話できるかという不純な気持ちに支配されているせいか、やけに調子が良かった。ラグビー部の主将がそんなことでいいのかというご指摘は甘んじて受けるが、どうか読者の皆様にはそんな彼も許していただきたい。なんといつてもまだ一八歳なのだ。

和仁にとってこの数日間は、チームの集中強化期間という言葉ではくくれない時間となった。かりんやめぐみとは廊下や食堂、旅館内ですれ違ふたびに短めの雑談をしたり互いの小腹をつつき合ったりするような仲にいつの間になつていた。世界は不思議で満ちている。

その日、午後の練習も終わる段になるとようやくすべてのメニューを消化したことになる。汗を流すためだけのシャワーを浴び終えて和仁はリネン室に来ていた。好んで洗濯を行う部員が他にいないので、この時間は彼に貴重な一人の時間をもたらしてくれるのだ。ぐおんぐおんと洗濯機のモーター音が鳴り響く中、備え付けのパイプ椅子に座つて本を読んでいるとき、ふと誰かの気配を感じた。

「山口さん」

「あ、こんにちは」

ぺたぺたとスリッパの足音を響かせながら、自分の身体以上に大きな洗濯物袋を抱えてめぐみが入ってきた。ぎこちなさそうな愛想笑いを彼に向けると、袋の中身をぼんぼんと空いていた洗濯機に詰め込んでゆく。

「あれ、山口さんが洗濯当番なんですか」

思わず話しかけてしまう。

「当番ってわけじゃないゆうが」

「あれ、そうなんですか。なんでまた」

うーん、と考え込んでしまう彼女を見て、急に申し訳ない気持ちになった。

「あ、もしかしたら失礼な質問だったかもしれない、すみません」

慌てふためく年下の男の子に、彼女はさきほどよりか幾分柔らかな笑みを向けてくれた。

「アタシの場合、誰かにやってほしくないき、自分でやるんです。人に自分の汚れも
ん見られゆう恥ずかしいですが」

——ああ、なるほど。

「それ、すつごくわかります。僕も同じなんで」

「ですよね」

室内は空調が利いているせい、めぐみはTシャツにチームの刻印がデザインされたスウェットパンツという軽装だった。短い髪はうなじまではつきり見える。前髪は自然におろされ、耳も出ている。洗濯という共通の話題が出たせいか、彼女はちょうど和仁の向かい側にあるパイプ椅子に座ってくれた。薄着なぶん、胸の谷間が見えそうでもあった。胸さえ小さければ男の子と間違えられてしまうかもしれない、中性的な顔立ちを

していた。

「嫌ですよね。自分のを誰かに見られるの」と、和仁。

「そうですね。特に女の子はその、いろいろあるき」と、少し顔を赤くさせるめぐみ。

「あの」

「ん」

「僕、年下なんですし敬語じゃなくていいですよ。むしろ敬語じゃないほうがいいかなーって思ってみたりしてますけど」

ダメですか？ と訊いてみる。土佐弁で彼女の声が訊きたいという単なるわがままだった。

「んー」

「お願いします。かわいい後輩の頼みだと思って」
思わずめぐみは吹いた。

「いつから「かわいい後輩」になったが？」と、土佐弁で和仁に言った。

二人の距離が少し縮まった瞬間だ。

「じゃあ、カズ君もアタシをめぐって呼び捨ててくれるのなら、敬語はやめゆうよ」
「いや、さすがに年上の女性に呼び捨ては。せめてめぐさんって呼ばせてください」
んー、とわざとらしく悩んでみせる彼女。組まれた腕に乗っかる童顔な顔に似つかわ

しくない巨乳。南国の果実を抱えているようにも見える。

「仕方ないなー」

「すみません」

狭い室内には笑う二人だけしかいなかった。その狭さもお互いの親密度を高めてくれるような気がして、和仁はリネン室にて彼女と二人になれたことを心から喜んだ。運命であってくれればいいのに、とすら思った。和仁は自分がロマンチストであることを自覚してはいなかった。

「椎名先輩がカズ君のこと、こじやんと（とても）褒めゆうよ。○校生なのにすごくしつかりしてるし、顔も可愛いって」

「褒めても何も出ませんよ」

アイスクらいなら奢ってくれてええよ。

年下の○校生に奢らせないでくださいよ。

「ほんと。それに椎名先輩の元カレにも似てるき、カズ君は」

「勘弁してください」

もちろん、かりんさんも嫌いではなかったが（むしろすごく好印象な人ではあったが）、一目惚れしてしまった相手にはあまり言われたくないセリフではあった。

「つてことは今、かりんさんはお付き合っていないんですね」

うん、とめぐみはうなずく。

「めぐさんは？」

思い切ったはずねると「3か月前に別れたき」という言葉が返ってきた。

「あ、すみません」

見た目が高校生、いや中学生と言われてもおかしくないような彼女が他の男とイチャイチャしている様は想像したくなかった。ましてや他の男のペニスをくわえてしゃぶったり、股を開いて誰かにすべてをさらけ出す姿を想像するだけで、嫉妬心がとめどなく湧いてくるのだった。そしてそんな下卑た想像をしてしまう自分自身に嫌悪感を抱いたりもした。

「謝ることやないよ。アタシ、あんまり男の人と続かないんよね」

「そうなんですか」

そんなに男をとつかえひっかえしてるのだろうか。見た目からはそんな印象は微塵もないが。

めぐみは自嘲気味に言う。

「会ったばかりの男の子に話すことやないき、ごめん」

「いや、ぜんぜんそんな」

洗濯、まだ終わらんね。

そうですね。

むしろ和仁からすれば永遠に続いてほしかった。

「あの」

「なに？」

こちらの表情を覗いてくるめぐみはなんだか色っぽかった。彼女のうなじからは香水とはまた違う、独特の甘い匂いがした。例えば実のたつぷり詰まったにんじんが採れる畑の土からは似たような香りがするのではないか。作りものではない素朴な、それでいて甘みのある匂いだ。

「いえ、なんでもありません。というか」

「うん」

「めぐさん。足の筋肉すごいですね」

会ったときからずっと気になっていた部分だった。さすがに大学の体育会系バドミントン部である。きゅつと締まった股関節の筋肉がスウェット生地の上からでも見てとれるのだ。

「あーひどい。細くなりたいたい思っちよるのに、知ってて言うが？」

「いや、僕は羨ましいと思って」

「これでも女の子なんやき、気い使いゆうよ」

「素敵な筋肉だと思います」

「もー」

ぐっと腕をつかまれた。その腕はめぐみの太ももの中心部に誘導された。

——あ。

「ほら」

「うわ、かたいですね」

確かに硬かった。だがそれ以上に彼女の肌に触れているという事実が和仁の鼻息を荒くさせた。

「カズ君は？」

「僕ですか」

今度は触られた。めぐみの指は思いのほか小さかく、マニキュアの塗られていないそれはかすかな温もりをもっていた。布ごしに和仁は彼女の体温を感じた。

——ああ。

下半身に血が巡るのを抑えきれない。幸か不幸か、和仁の「不完全なそれ」はサイズが小さいせいもあって、その高まりはまだ彼女にバレてはいない。

「めぐさんのほうがぜんぜん硬いじゃないですか」

「だねー」

もこもこと彼の身体をあちこち触り始めるめぐみの右手を思わず握ってしまった。

「あ」

「あ」

お互い小さく声を出してしまった。

「めぐさん」

めぐみは手を振り払おうとはしなかった。受け入れてくれた証だと和仁は悟った。無言になってうつむく彼女は照れているのだろうか。小さな顔に近づく。

「いいですか」

訊いてみた。

めぐみは小さく「だめ」とつぶやいた。

「え」

そのときだった。

ぴーっぴーっど洗濯機のアラーム音が鳴った。めぐみは彼の手を離すと、終わったばかりの洗濯物を素早くカゴに放り込んで「お先」とだけ言い残して部屋を出ていった。後には呆然とした無垢な男子○校生がひとり、股間をおさえているだけだった。

両陣営の合宿は何事もなかったかのように進んだ。あれから和仁とめぐみがリネン室でかち合うことこそなかったが、自由時間に外出したコンビニでぼったり出くわしてから少しの間雑談したりと、そんな他愛もないことがかりんとも起きた。ついでに言えば和仁はついに箱崎の追及を避けきれなくなり、年上の女子二人に箱崎を紹介し、4人で夜中のロビーにてポーカーで遊んだりもした。そのぐらいだ。

金曜日の夜。

和仁は夕食後のミーティングと入浴も済ませて、自由時間にふらふらと散歩に出かけた。町のすぐ近くなので、散策も退屈ではなかった。偶然、かりんと出くわした。

「おや」

「こんばんは」

かりんも一人だった。和仁は防寒対策にウインドブレーカーを、かりんはダツフルコートにマフラーを捲いていた。二人が出くわしたのはシャツターの閉められた店が並ぶ商店街の一角だった。

「危ないですよ、女性がひとりで出歩いてちゃ」

「その女性から昨夜さんざんお金を捲き上げたのはどこのどいつだ」

「賭博は犯罪行為です。あれはあくまでもゲームを楽しんだ謝礼金として受け取ったんです」

「ナマイキい」

もつと○校生らしく振舞いなさいな、と頭をヘッドロックの形で抱えられた。もちろん本気ではないのでかりんの体温と吐息を直に感じる事ができて和仁からすればむしろラッキーだった。

ほんの数日の関係ではあるが、じゃれ合う仲になることができたのはお互いの相性の良さもあつたのだろう。和仁は決して社交的な性格ではないと自己分析している。かりんの人柄があつたからこそ、なのかもしれない。

「ねえ、帰って何かやることある？」

「いえ、特に。もうあとは寝るだけですよ」

「練習は明日が最終日だよね？」

「はい」

「またちよつと悪いこと、しよか」

何日か前に食堂で見た表情と同じものをかりんが見せた。二人でサボろうと提案してきたときの顔だ。

「いいところ見つけたんだ。来る？」

「は、はい」

素直に彼女の背中について行った先には、和仁らが寝泊まりしているとことは別の小

さな温泉宿があった。

「部屋とってなくても温泉は入れるらしいよ」

「うわー、いいですね」

ほんとに観光に来てみたいですね。

「でしょ」と嬉しそうにかりんもうなずく。

受付カウンターに立っていたのは年配の女性が一人だけだった。二人を見てにこやかな顔つきで「家族風呂が空いておりますが」と提案してきた。

家族風呂。温泉での貸切風呂のことである。普通の浴場よりも狭いが、プライバシー空間が保たれている中で温泉に浸かることができる。

かりんはちらりと横目をやりながら「ラッキーだね」と言った。和仁に「一緒にいいよね」と訊くので彼も首を横に振るわけにもいかず、「そうですね」とさりげない返事になるよう努めた。内心では心臓が破裂しそうだった。

暖簾をくぐった先には狭い脱衣場があった。

がちやん、とかりんが鍵をしめる。

「すごい、アタシも家族風呂は初めてだけどこんな風になってるんだ」

「ちよ、かりんさん」

鍵がしめられて、はじめて和仁は慌てる態度を露わにすることができた。

「いいじゃないか、せつかくなんだし。それに」

「それに？」

「めぐのこと、好きなんですよ」

固まってしまった和仁に、かりんは優しい声をかけた。バレバレだよ、と。

「アタシじゃ役不足かもしれないけどさ、ちよつと女の子にも慣れておいたほうがい
いかなって思ったよ。まあそれは建前たてまえで、単にアタシがお風呂に入りたかっただけなん
だけどね」

ぺろつと舌を出す。和仁にはどこまでその言葉が本気なのかわからなかった。すべて
本音かもしれないし、すべて嘘なのではないか、とも思った。

「ほら、入るよ」

彼女はコートとマフラーをとり、めぐみが着ていたものと同じスウェット姿になった。
やはり大きな胸が目立つ。仕方なく和仁も上着を脱ぎ、ジャージを脱いで上半身裸にな
る。

「良い身体だね」と、かりん。

「恥ずかしいですよ」

和仁からすればわけもわからずにここまで来てしまったという面持ちだ。

——ほんとにかりんさんの裸を見ていいのかな。

本音を言うと、今すぐにも彼女を抱きしめたいと思った。あの大きな胸にしやぶりつきながら、硬くなった肉棒を彼女のお腹にこすりつけたいとすら思った。彼女は怒るだろうか、それとも受け入れてくれるだろうか。思春期の頭にはもはや温泉に浸かるのではなく、そのことで頭がいっぱいになってしまっていた。

「お先に」

「え」

気がつくとも後ろですでに用意を終えていたのか、タオルを巻いたかりんの後ろ姿が露天風呂へと消えていった。どうやら和仁が逡巡^{しゆんじゆん}している間にさっさと服を脱ぎ終えてしまっていたらしい。はやくおいでよー、と反響した彼女の声が戸の向こうから聞こえた。

「はい」

ふと、彼女が衣服をたたんだカゴに目をやる。ピンクの下着が無造作に置かれてある。――うわ、かりんさんの履いてたパンティだ。

パンティ。

その言葉を頭の中に浮かべるだけでひどく淫らな気持ちに襲われる。こっそり見てしまおうかと彼の中の悪魔が囁いている。

――いや、だめだ。

せつかくこの数日で築き上げた信頼関係をここで崩すわけにはいかない。でも見たい。

——いや、だめだ。

彼にとつては大変な努力だった。どんなきついトレーニングよりも忍耐を必要としたが何とか理性を保つ。彼女の使用したカゴから目を逸らし、ボクサーパンツを脱ぐ。すっかり勃起した彼のペニスは天井を向いてそそり立っていた。

——どうしよう。

ここでいくら待っていても収まりはしないだろう。自分で処理する時間もない。仕方なくそのうえにタオルを捲いてみる。地面と平行するようにテントが張られた様はかなり不格好だった。

——ええい、もう。

どうしようもなかった。彼は勇気を振り絞って風呂場への戸を開けた。

「おそいよー」

かりんは足元だけ湯に浸かる形で岩場に腰かけていた。胸元までタオルを捲いているので肝心な部分は隠されていた。

「すみません」

「気持ちいいよ」

無邪気に笑う彼女を見てみると、ふしだらなことばかり考えていた自分が嫌になる。その嫌気が幸を奏したのか、すこしだけ勃起が収まったようだった。それでも前屈みに

なりながら、彼女の向かい側に和仁も腰かける。

「いいですね」

「でしょ、穴場だよね」

竹柵で覆われた家族風呂は身体を洗う際の蛇口と湯桶が4つほどしかない、小さな露天風呂だった。他には誰も入ってこないことも考えると、湯と一緒に贅沢な気分になることのできる場所、ということなのかもしれない。

「さっきの話だけだよ」

「はい」

「カズ君はめぐのこと、実際どう思ってるの？」

「いや、どう思ってるっていうか、なんていうか」

わからなかった。好き、なのは確かだ。けれど実のところまだめぐのことを彼はほとんど知らないのだ。自分の「好き」がどこから来ているのかわからない、とその旨をかりんに打ち明ると、相手はケラケラと快活な笑い声をあげた。

「真面目なんだね」

「そう、ですか」

「アタシも偉そうなことは言えないけどさ。いいんじゃない？ 好きなら好きで理由なんかなくても。いつかい遊んでみるのもアリだと思うよ」

遊ぶっていうのはゲームだとかカラオケのことじゃないことはわかるよね？ とか
りんは続けた。

「は、はい」

「まあ東京に戻ってもさ、連絡してよ。アタシもカズ君みたいなかわいい弟みたいな子とはなかなか知り合えなくて」

「でも大学でも後輩さんたちとかいるんじゃないんですか」

「いるけどさ」

そこで彼女は大きく伸びをした。深い谷間が晒される姿に和仁はどきまぎするしかなかった。海綿体に血が溜まっていき、収まりかけたペニスに熱い息吹が戻るのを感じる。タオルの布越しとはいえ、勃起を彼女に晒すわけにもいかず、和仁は手で前を抑える。

「ふふ」

「え」

「君を見てると、なんだかほんとにかわいい弟ができたみたいで嬉しい。アタシ末っ子でさ。面倒をいつも見てももらえる側だったから」

「末っ子、ですか。ぜんぜんそんな風に見えませんが」

「カズ君は？」

「姉がひとり、います。今はその姉と二人暮らしなんです」

「へえ、またどうして？」

彼は口をつぐんだ。別に言うのが嫌であったわけではないが、言うべきことなのかわからなかったからだ。せっかくの楽しい雰囲気をも崩したくはなかった。

「あ、ごめん。踏み込んだこと訊いちやって。でも、そっか。いろいろあるんだね」
すみません、ともう一度彼は言って「いろいろ、あるらしいです」と笑ってみせた。

「でもいいなーお姉さんが羨ましい」

「そうですか」

「そうだよ。こんなかわいい弟がいるなんて。お姉さんと仲は良いの？」

「悪くはないと思いますけど」

嘘ではなかった。ただいかんせん年が離れていることもあり、一緒に遊ぶ間柄でもないことも確かであった。

「さーて」と、かりんがおもむろに立ち上がった。

足の付け根にある奥の繁みが一瞬だけ見えた気がした。

――やばっ。

ペニスの手の下でどくんどくと脈打っているのを感じた。

「じゃあかわいい弟の背中を流してあげよう、おいで」
手招きされた。

「へ」

「へ、じゃないでしょ。はやく」

うう。

蛇口のところには鏡が備え付けられており、身体を洗っている者の姿をそこで確認できるとなっている。和仁は今、湯桶に腰かけてタオルも外された状態でそこにいた。

「誰かに背中を洗ってもらえるのって気持ちいいでしょ」
後ろでかりんが言う。

「は、はい」

彼は答えながらも勃起を抑えるので精一杯だった。

——うう、女の人の手、なんでこんなに気持ちいいんだろう。

直に触れられることで彼女の温もりがダイレクトに皮膚を刺激してくる。ときどき肩同士が当たったり、それよりも柔らかい何か背中を突いたりする。

——もしかして、おっぱい？

考えただけで下半身に力が入ってしまう。自然と彼はつま先を反らせて身体をこわばらせている。両手で必死に前を抑えている。校生が鏡に映る。

「はい、腕も」

「ああ、ダメですよ」

「ダメ？」

妙に艶のある声で訊かれると、もう否定できなかつた。

「うう、お願いします」

「ふふ、よろしい」

てつきり片手ずつ洗われるのかと思っていた和仁は「とりあえず洗われていないほうの手で前を隠そう」と考えていた。甘かった。彼女は和仁の両腕を反らすようにして同時に背中側へもっていったのだ。自然、鏡には和仁の最大限に勃起したペニスが晒されることになる。

「あああ！」

「ん、どうしたの？」

「い、いえ何でもありません」

——ぜったいバレてる。

鏡にはおそらく特殊なコーティングがされているのだろう、この湿気でも曇ることなく風呂場を反射させている。その中で勃起したピンク色のペニスがびくんびくんと跳ねる間抜けな様もすっかり映し出されている。せめて足を閉じようとするのだが、興奮の

渦が彼の脳の回路さえも鈍らせているせいか、身体が言うことを利いてくれない。鼻歌まじりにボディソープを伸ばすかりんの、白い太ももが眩しく光っている。

——うう、ああ。

かつてない羞恥心に襲われながらも、不思議と嫌な気持ちはしなかった。彼自身も知らなかった性癖が今、皮剥かれようとしているのだ。

「じゃあ前向いて」

「はい、え」

「え、じゃない」

「いや、それは勘弁してください」

「どうして？」

ようやく解放された腕でしっかり前を抑える和仁に、かりんがその耳元に口を寄せた。

「わかってるから安心して。大丈夫だから」と優しく囁く。

——やっぱり！

全部バレていたのだ。彼女相手に欲情してしまっていることを。

「い、いつからですか」

「うーん、脱衣場のときからかな。というか、カズ君は会ったときからアタシの胸ばかり目がいつてるから、そりゃね」

「すみません」

「ふふ、いいの。だいたいここに誘ったのはアタシだしね。男の子だもん」
だからほら、気にせず、ね。

「ち、違うんです、僕」

「なに」

「あの、その」

和仁は腹を括った。

「僕、小さいんです」

「え」

「あの、すごく小さいんです。ここが。だから恥ずかしくって」

時間が止まったような気がした。かりんの後ろで落ち葉がひとひら、ゆっくりと舞いながら湯の上に落ちた。波紋が広がる。

「あっははは！」

「笑いごとじゃないですって」

大笑いしてタオル越しに自分のお腹を抑えるかりんに、和仁はうなだれながらも憤慨する。

「ごめんごめん。そっか、男の子って気にするんだね、そういうこと」

「そりややっぱり、同級生のとかと比べると明らかに小さいんですから」

「あのね、カズ君。女の子はそんなのぜんぜん気にしないから、いいんだよ小さくても。まあ気にするって口に出して言う子もいるかもしれないけど、そんなのほんとに気にしなくていいよ。大切なのはもっと違うところにあるんだから」

理屈はわかる、が。

「ほら、だから勇気を出してアタシに見せて。どんなものか見てあげるよ」

「は、はい」

なんとなくさつき彼女が大笑いしてくれたおかげで幾分、羞恥心のほうはまだマシになりつつある。それでもじゅうぶんに恥ずかしい。彼はゆっくりと振り返ることにする。前を隠しながら。

「ほら、足も開いて」

かりんは和仁が開いた膝の間に座り直す。大きなお尻が彼女のボディラインを妖艶に見せていた。むっちりとしたオオルから突き出たバストとヒップはどこまでも女性的な魅力に満ちた輪郭をしていた。

うながされて諦めたように手をどける。

「ああ、見ないでください」

そして彼は、女子大生に自分の幼いペニスをさらけだしていた。

「あ、かわいい」

「うう」

びくん、びくん。

勃起したペニスが彼女の目の前で震える。

「皮もかぶってるんだね」

「い、言わないでください、恥ずかしいですよー」

かりんはまじまじとそれを見つめていた。「近いですって」という和仁の言葉は無視された。

「ふーん、なるほどね」

「何がるほどね、なんですか」

にやり、と悪そうな笑みを彼女は浮かべた。

「お医者さんごっこ、しよっか」

「へ」

「やったでしょ、子どものとき。アタシが先生でカズ君は患者さんね」

「僕、もう○校生なんですけど」

「誰も見てないんだし、いいじゃない。あ、ちなみに泌尿器科だから」

「なんですか、その設定」

いいからいいから、と彼女は和仁の腰をつかみ、桶にしっかり座り直させる。もちろん足は開かれたままだ。

「はい、カズ君は今日はどうしたのかな」

どうやら物語はすでに始まっているらしい。彼女の優しい声色が奇妙な高揚感を味あわせてくれる。

「え、えーと実は先生に相談があつて」

「なーに」

「ココが小さいのが悩みなんです、先生、どうしたらいいでしょうか」
ペニスが跳ねる。亀頭は夜空に向けて脈動している。

「ココってどこかな」

「うう、言わなきゃだめですか？」

もちろん、とかりん医師は笑顔でうなづく。

「ち、ちんちんです」

「ふーん。カズ君はちんちんが小さいことが悩みなのね」

——ああ！

かりんの口元から淫らな言葉が出てくるだけで、和仁のペニスは激しく唸った。
「あれ、先生がちんちんって言うのと、コレがぴくんって動くのね」

「ううう」

「確かにこれは重病かも。もう一度言うね？」

ちんちん、ちんちん、カズ君の小さいちんちん。

「ああ！ 女の人がそんな言葉口にしちゃダメですって」

かりんの目の前で小さな、しかし硬くどがった肉棒が幾度も跳ねる。それをじーつと彼女が見ている。恥ずかしさが何倍にもなつて彼を襲う。

「うう、かりんさん、恥ずかしすぎますって」

「でもここはすごく嬉しそうに跳ねてるけど」

「それは違うんです」

「んー何が違うのかな？」

ふーつと彼女の息吹が先っぽに当たる。それだけで「ああ」と声を挙げずにはいられなかった。

ああ！

「違わないですすみません。恥ずかしいのが、どうしてか興奮しちゃいます」

「そうでしょー。そういう人、何ていうか教えてあげよか」

「な、何ていうんですか」

かりんが再びささやいた。

へんたい君、って言うんだよ。

ああ！

びく、びく、びくん。

「へんたいって言われて嬉しくてたまらないんですよ。カズ君は口よりも下の僕ちゃんのほうが素直で良い子みたいだね」

「ご、ごめんなさい」

「あら？」

彼女は覗きこんだペニスにさらに顔を近づける。

「先っぽからなんかお汁が出てるね。これはお湯とは違うみたいだけど何かな」と、人差し指でちよこんと肉棒の先端をつつく。

「あああ！」

触られた！ 女の人に触られた！

それを合図にさらに肉棒の先端部分から透明の液体が溢れ出て、彼の亀頭部分を妖しく光らせる。かりんの指は容赦なくその液体を肉棒の側面部分にも塗りつけていった。棒が小さいおかげで二本の指を使うだけでまんべんなく塗られてしまう現実が悲しいが、和仁にはその悲しみを味わう余裕もない。

ぬちゅ、くちゅ。

「あれ、イヤらしい音も聴こえるね。ねえ、これはなに」

「あ、もうダメです、かりんさん許して」

「許す？ アタシはこれが何か訊いてるだけなんだけど。何か先生に教えてくれないかな、ほら」

指の動きがだんだん肉棒をしごく動きに変わってゆく。たまらず和仁は悲鳴に近い声をあげた。

「あああ！ い、言います。我慢汁です」

「んー、もしかしてエッチなこと考えてたんですかね」

「は、はい。先生にしごいてもらうなんて夢みたいで」

「あら、これは診察なのにしごくだなんて、イヤらしい。カズ君はいけない患者さんですね。だいぶへんたいが蔓延してしまっているようですね」

しゅ、しゅ、くちゅ、ちゅぷ。

かりんの指の動きがだんだんと激しくなっていた。

「あ、かりんさん本当にもうダメです、僕、我慢できません」

足を開いたままの状態で和仁は首をイヤイヤと横に振った。6つに割れた腹筋は波打ち、つま先もびくびくとペニスの脈動に合わせるように震えた。

「んー、我慢できないとどうなるの？」

「で、出ちやいます。かりんさんにかかっちゃいますって！」

「出る？ 診察中なのに先生にぶっかける気？」

「だ、だって先生の指が、あー」

「これは触診なんですよ。エッチなことばかり考えるへんたい君だからダメなんです、我慢できませんか？」

「む、無理です。あああ」

彼はそれでもそれを抑えようと楽な姿勢になろうと体勢を変えるべく、膝を曲げた。結果的にそれは彼女に対してM字開脚する羽目になり、深い羞恥心が彼を襲った。羞恥心はそのまま快樂につながる。

「あら、自分からそんな恥ずかしい格好するなんて、ほんとのヘンタイ君だね。女の人に射精するとこ見られたいのね」

「あーち、違うんです！」

イヤイヤ、と首を振り続ける和仁だが、とろけるような表情と宙に向かって前後する腰は何の説得力もなかった。

「あー、腰まで自分で動かして。そんなに興奮しちやってるのなら一回吐精処理しなくては大めだね。仕方ないから先生の手で射精しちやいなさい」

「だ、大めですよ。恥ずかしすぎます！」

「そうねー。女の人にぜんぶ見られちゃうんだもんね。ほら、もっと腰ふって。思いきりどぴゅどぴゅ精子を出しちやいなさい」

「あああ、い、いけないよ、ああ」

しゅ、しゅ、ちゅく、ちゅぷ。

「見てるよ。カズ君の小さいちんちんが勃起してびくびくしてるよ、ぜんぶ先生に見えちゃうてるよ。恥ずかしいね、情けないねー。すっごく硬くて熱いよ、カズ君のおちんちん」

指の動きは変わらず肉棒を揺らし続ける。カクカクと揺れる腰を抑える術を、思春期の童貞男子が持つはずもなかった。

「かかっちゃう、かりんさんにかけてちやう！」

「ほら、おいで」

その優しい言葉が引き金となった。淫らに囁きかけるその唇が唾液で濡れているように見えた。

「あ」

びゅ、と間欠泉のように最初の一吹きがあった。

照明の高さまで飛んだろうか、高く浮いた白濁液は和仁自身の肩に落ちた。

びゅ、どぴゅ、びゅ、びゅ。

「あああ」

「あん、やん」

女の子らしいかりんの悲鳴に合わせるかのように、ペニスの先から噴射されたそれは二人の身体に降ってくる。

びゅ、びゅ。

——そういえば最近オナニーしてなかったな。

快感の渦の中で、ぼんやりと和仁は考えていた。合宿中なのであり、自分で処理する場所も猶予もなかったのだ。

「やん、すっごーい」

びゅ、びゅ、びゅるる。

ペニスの熱い鼓動をその手で感じながら、かりんはその小さな先端からとんでもない量の精液が溢れでるのを間近でとらえていた。

「ああううう」

恍惚とした、だらしのない表情をさらけだしながら和仁は腰を上げ、無意識のうちに最後の射精を彼女に向けてしまった。

どぷっ。

「やん」

濃ゆい精子の塊が彼女の頬に当たり、どろりと卑猥な曲線を描きながら岩に落ちていった。

「はあ、はあ、はあ」

「ああ、すごいいよ。カズ君。すごい量」

しばらく動けない腰をつかまれながら、和仁は目の前の女性の言葉に荒い息でうなずくしかできなかつた。

「ほんとにすみません」

「ふふ、いいの。アタシが無理やり出させちゃったんだし」

それより嫌じゃなかつた？ と訊かれ、ぶんぶんと首を横に振った。顔がカアッと赤くなるのを自覚しながら「最高でした」と呟いた。

和仁は今、精子で汚れた身体を彼女に洗い流してもらっていた。温めのシャワーが心地よく彼の皮膚を弾いていた。まだタオルを巻くことは許されておらず、無防備な肉棒をさらけだしたままだ。さすがに溜まった何日分かの精子を一気に出したおかげで今は勃起することなく縮こまっているが、小さくなったペニスを見られるのだから恥ずかしい

「かわいいお子様のちんちんだね」

うう。

ぴん、と指でペニスを弾かれた。

「ほんとにすごい量だったね、溜まっていた？」

「少し」

そーだよ、合宿中はオナニーできないもんねーと無邪気に笑うかりんは顔に付いた精子を洗い流しただけで、まだ身体の所々に生臭い白濁液が付着している。彼女がシャワーノズルを持って動いたたびに、むちむちした太ももの付け根が見えそうになる。

「はい、じゃあ次はおちんちんね」

「ああ」

柔らかくなった肉棒を再び触られる。ぴくんと反応してしまふ。その鼓動を手の平で感じたのか、かりんは「もう、元気なんだから」と気にせず洗い続ける。

「か、かりんさん」

「んー？」

「僕、もう我慢できません」

「え、もしかしてまた出ちゃいそうなの？」

和仁は慌てて首を振る。視線の先には彼女の豊満なバストが布きれ一枚に包まれてい

た。その視線を感じ取った彼女は「あーごめんごめん」と笑う。

「そういえばまだ患者さんにお薬あげてなかったね」

「え」

はらり。

かりんはそれまで頑なに外さなかつたタオルをあっさり取り払った。

胸には洋ナシに似た大きなふたつのかたまり。薄桃色の乳輪と丸く小さいボタンのような乳首、乳房の山はゆるやかに曲線を描いてそこに実っており、とてもきれいな果実がそこにあった。美乳だ。

お腹には肉が多少ついてはいたが、腰のラインにはしっかりとくびれがあった。下の豊かな繁みはVラインに丁寧に処理されており、大きなお尻に似合っていた。シャワーから滴るお湯はその毛の先から地面に滴り落ち、その滴を呑みたいとさえ和仁は思った。

「す、素敵です。とても」

「あら、ありがとう」

それまで持っていたシャワーで付着した精液をざっと流すと、かりんは和仁の前に膝をつき、自らの乳房を突き出した。

「はい、お薬の時間ですよ」

「あ、ああ。かりんさん、いいんですか」

「飲みたくない？」

「の、飲みたい。飲みたいです！」

恥も外聞もなかった。彼女の右の洋ナシにしゃぶりつき、左のそれを揉みこんだ。

——や、柔らかい。

「あん、優しくね」

「す、すみません」

ちゅぱ、ちゅぱ。

味こそしなかったが、吸うほどに満足感が波となって押し寄せてくる。彼はかりんの胸を交互に舐め、吸い、その舌でいじり倒した。

「あん、すごいやらしい。やっぱりへんたい君だね。カズ君は立派なへんたい君だね」

「うう、違いますよー」

「あれ、まだ言うかな。往生際の悪い患者さんにはこうしてあげる」

そう言い放ち、かりんは和仁の陰蠢をぐっと掴む。

「あああ」

「ふふ、タマタマもかわいいんだね。ころころしてあげる」

白い指が二つの玉をもて遊んでいると、そのすぐ上にある肉棒は再び力強く天を向き

始めた。

「あああ、見ないで。かりんさん、見ちゃだめです」

「すごい、どんどん大きくなってくるよ」

見られた。小さいそれから大きく変わる様をすべて見られてしまった。その事実がやはり異常なまでの快感をひきつれて彼を襲う。

「もうちんちんが勃っちゃったね。そんなにおっぱい美味しい？」

「んー、お、美味しい。かりんさんのおっぱい、すごいよ」

「かわいいなー、えい」

「んぐ」

乳房が顔全体に押し付けられた。甘ったるい匂いが和仁を包み、和仁はやっぱり自分で腰を動かしてしまう。

「んん、んぐ」

「ふふ、息ができなくて苦しいでしょ」

「んー、んー」

ふはあ。

やっと解放された和仁の唇を、彼女のそれが襲った。
ちゅ。

「キス、しちやったね」

「順番がおかしいような気もしますけど」

「それはカズ君がエッチすぎるからだよ。アタシはキスから始めようと思ったのに」
「う、嘘だ」

会話の間にもキスを繰り返す。やがてお互いの舌が絡み合う。
ぬるり。

彼女の舌がなめらかに動き、彼の歯を撫でたり舌を突いたりする。その動きに和仁も必死になって自らの舌についてゆく。かりんの唇はやや厚めで大人の妖艶さに満ちていた。

——ああ気持ちいい。キスってこんなに気持ちいいんだ。

正直、今の今まではアダルトビデオにてあんなにもキスを繰り返す男優、女優さんたちの気持ちがいまではよくわからなかった。でも。

今ならわかる。

——ああ、かりんさんのべろ、あったかい。

「ん、ん」

「ああ、あ」

お互いの鼻がこつんと当たり、彼女の呼吸を肌で感じる。キスをしてから、不思議と

羞恥心は消え、代わりに今までとは違った満足感が和仁を包んでいた。彼はためらうことなく彼女を抱きよせ、ぷっくりと出たお腹に手を這わせた。

「あん、意地悪。スタイル悪くてごめんね」

「とんでもないです。最高の身体です、とてもえっちで」

「もう」

這わせた手が向かった先には繁みがあった。

「足、開いてもらっていいですか」と訊くと「へんたい」と彼女は笑って罵ってくれた。握られたペニスがぴくんと跳ねた。

「カズ君ってドMでしょ」

「わかりませんが、そうかもしれませぬ。かりんさんに罵られると、すごく興奮するんです」

「ふふ、やっぱり」

しこしこ、と彼の肉棒を優しく愛撫してくれた。ああ、と身悶えながらも和仁も繁みの奥に手を辿りつかせることに成功する。

「カズ君」

「はい」

「女の人のそこに触るのは？」

「もちろん初めてです」

そこで彼女に腕を触れられた。

「あんまり乱暴にしちゃダメだよ。最初は指先で優しく、撫でるように」

「はい」

言われた通り、まだ見ぬ秘部へ指を添える。しやりしやり、と毛がかすかな音を立てた。

「毛、僕より多いですね」

「いや？」

「いえ、すごく興奮します」

「よかった」

突如、びくと彼女の身体が跳ねた。

「あん」

「ここですか」

「そう、そこ、ゆっくり優しく」

触れた先には突起した何かがあった。それに人差し指でかすかな振動を与えるたびにかりんの肩が、膝が震えた。

「あん、やん」

「ここなんですわね」

返事もできない彼女がうなづく。

「ねえ、かりんさん。ここ、なんていうんですか」

「エッチ」

「教えてください、先生」

あん、やん。

びくんびくんと激しく跳ねるかりんに和仁は驚き、射精とはまた違った快感を彼に与えてくれた。自分のペニスを彼女のお腹あたりに当ててみる。ぷにぷにと柔らかい感触が鈴口を刺激するだけでなく、年上の女性に自分の恥部を押し当てているという事実。彼の肉棒は脈動を重ねた。

「やん、かたい、いやらしい」

「ねえ、教えてください。僕は今かりんさんのどこに触っているんですか」

今やすっかり身体を横たえて、和仁のされるがままになっているかりんは首を起こして「クリトリス」と小さくつぶやいた。

「かわいい、かりんさん」

がばつと彼女を抱きしめる。「なまいきつ」という言葉は無視する。

「あ」

勢いあまって、指はさきほど撫でていた部分の下側にいった、と思いきや、ぬるりと奥に入ってしまった。

———すごく濡れてる！

「いやん、恥ずかしい」

ぐじゅ、じゅぷ、と穴を指でかき混ぜるたびに音がした。

「かりんさん、すごいです。ぐちよぐちよじゃないですか」

「だって、あん。カズ君のちんちんがかわいいから」

「かりんさんこそ、すごくエッチじゃないですか。こんなに濡らして」

「あん、もう、バカ」

かりんの足が左右に開いてゆき、和仁の愛撫を受け入れやすい体勢に変わってゆく。もつといじって、と急かされているようで和仁は指をさらに激しく出し入れする。

「あん、いいよ、カズ君。ほら、おっぱいもいじって」

「はい！」

空いていた手で乳房をつかむ。さっきよりも幾分か乱暴に揉みしだくが、彼女は身体をのけ反らせて「あん」と喘ぐばかりだった。

「か、かりんさん。僕も」

「んん」

何か言いかけた彼女の口を自らの口で塞ぐ。お互いの舌がもつれあう中、かりんは和仁のペニスを上下に激しく動かす。

しゅ、しゅ、くちゅ、しゅ。

ぐじゅ、ちゅぷ、ちゅぷ、じゅぷ。

「あああ」

「あん、いやん」

お互いの性器を愛撫しあう男女は白い湯気に包まれ、露天風呂全体を淫らな空気に変えていた。今は二人だけの空間なのだ。

「あん、カズ君。おまんこ気持ちいいの、すごい」

「か、かりんさん、エッチすぎますって」

「だって、あん。カズ君のちんちんもこんなに喜んでるよ。もうぬるぬる。もつと言
ってほしい？」

くちゅ、くちゅ、しゅ、しゅ。

「言っ
てほしい。かりんさんの口からエッチな言葉が訊きたい」

「ふふ、カズ君のホーケーちんちん、すごく硬くなってるよ。我慢汁もこんなに。いやらしい、スケベ」

——ああ。

かりんのぶあつい唇から出る淫らな語句が湯気にまぎれて和仁の耳に突き刺さる。それらに煽られるように彼は彼女の大きなお尻をわしづかみにする。

「かりんさん、お尻おつきいです」

「やん、えっち、いやあん」

「ああこもやわらかい、すごい」

「もう、そんなお肉ばかりでイヤだよ、カズ君は」

「ぜんぜん嫌じゃないです。すごく、その、素敵です」

「ほんと？」

「はい」

コンプレックスだったのだろうか。和仁の真剣な表情とその返事に気を良くしたのか、かりんは腰をくねくねと激しく振り乱した。

「あ、あ」

かりんの乳房に顔を埋める和仁はもはや限界だった。

「ん、僕イっちゃいそうです」

「いいよ、アタシも、もうすぐ、はん。だからっ。一緒に」

「ああ、かりんさん出ちゃう、かりんさんの指でまた白いのたくさん出しちゃうよ、ねえかけていい？ かりんさんのお腹にかけていい？」

「いいよ、かけて。白くていやらしいお汁、アタシのお腹にたくさんかけて」
二人の息遣いが一段と荒くなり、そして。

「あああああ！」

「はああああん！」

びゅ、どぴゅ、びゅ、どぷっ。

びつくん、びくん、びく。

肉棒からまた大量の白濁液が彼女のお腹を淫らに汚し続けるなかで、彼女は小刻みに下半身を揺らせていた。彼女の秘部をいじっていた和仁の左手は、愛液でふやけていた。

ぺろっ。

思わず和仁はその左手を舐めてみると、こつんとおでこを叩かれた。

「こら、へんたい君」

「す、すみません」

全速ダッシュを繰り返した後のように、二人とも呼吸が荒かった。全裸のまま惰性でお互いの性器や乳房をいじり続けていると、かりんが言った。

「続きはさ。東京でしようか」

「そうですね」

夜空の星だけが二人を見下ろしていた。澄んだ空気を煙が舞いあがるように湯気が天へと昇っていく様子を二人で眺めていた。

ちゅ。

かりんが和仁の頬に優しく口づけをした。自らの乳房を彼の腕に押し付ける。

「気持ちいい？」

「最高です」

桃色に染まった乳頭をぴん、と指で弾く。

「こら、遊ぶな」

怒られた。

*

合宿の最終夜はさすがにお互いのチーム内にて打ち上げが行われ、交流をはかるところではなかった。練習でへとへとになりながら、OB連中にどやされながらも何故かへ

らへらと笑い続ける上機嫌な主将を見て、箱崎は「なんか変なもんでも食うたんか」と、訝しげに訊いてきた。もちろん真相を言うわけにもいかず、なんでもないよと言いなながら和仁は笑顔で最後の練習を終えたのだった。

Ｔ学園春合宿の恒例行事として、最後の練習はひたすらダッシュを繰り返す「しごき」練習があつたが、足がもつれそうになりながら笑顔を絶やさないうち和仁をさすがに気味悪がる視線もあつたほどだ。

翌朝、帰りのバスが旅館に到着する１時間前のこと。和仁と箱崎はかりんとめぐみと一緒に向こうチームの部屋に４人だけである時間ができた。

「春の関東大会、がんばりなよ」と、かりんが言った。

「東京戻っても連絡してくれるんやろ」

「でも箱崎君はカノジョいるんですよね」と、めぐみ。箱崎がいるせいか、標準語に戻っている。

「いや、俺は純粹に素晴らしい先輩がいることが幸せですよん」

「まったく、モテる男は違うねー」

めぐみ、箱崎君を誘惑しちゃだめだからね。

「そげんせんちゃですよ。人聞きの悪いき」
のどかな笑い声が部屋に響いた。

ベランダの軒先には梅の花が咲いていた。
春がすぐそこまで来ていた。

この作品における、著作権は著者にあります。
無断での使用は固く禁じます。

つづく

午後のお姉さん
編集部より